変わる日本の「暮らし」と「まち」 2

開墾地からマンモス団地へ

千葉・豊四季台団地（1964年◆昭和39年）

新田匡央
にった・まさお

illustration：Shigeyuki Sakata

千葉県柏市豊四季台。東京オリンピック開幕を間近に控えて日本全体が高揚していた1964年4月、この地に全国でも屈指の規模を誇る団地が誕生した。

その名は豊四季台団地。約37万㎡、東京ドーム8個分の広大な敷地に、4600戸ほどの団地が建設された。当時の住宅公団の団地のなかでも、埼玉県草加市の草加松原団地、千葉県松戸市の常盤平団地などに次ぐ規模だ。約1万3千人の入居者数は、その時点の柏市の人口の1割を超えていた。

なぜこの地にマンモス団地が建設されたのか。団地ができる以前のこの地に何があったのか。豊四季という土地の過去をさかのぼることで、過ぎ去った昭和の残像が垣間見えるかもしれない。

豊四季の歴史に詳しい豊四季歴史文化研究会の末武芳一氏によると、この地は江戸時代から続く広大な「牧」だったという。牧は軍馬の育成を担う放牧場のこと。幕府は千葉県一帯に「小金牧」「佐倉牧」「嶺岡牧」を設置し、豊四季は小金牧を構成する「上野牧」に含まれる土地だった。

◆下級武士を救う開墾地

1869年、明治維新の奔流のなかで牧は廃止され、跡地は国策として開墾地とされた。大政奉還で生活の糧を失い窮乏化する下級武士を救うためだった。

江戸詰めの武士のうち、一部の高級武士は出身藩に生活の基盤を求めた。だが戻る場所のない下級武士は、藩からの禄が途絶えると食い詰めてしまった。彼らの生活を救う政策として、牧の開墾が進められることになったのだ。

開墾にあたり、開墾局御用掛の役人北島時之助は、13の開墾地それぞれに名前を付けた。順に初富（現鎌ヶ谷市）、二和（現船橋市）、三咲（現船橋市）と続き、4番目となったこの地は、四季を通じて実り豊かであれという願いが込められて「豊四季」となった。

豊四季への入植は1869年の冬に始まる。第1陣は11月の56戸199人。江戸の下谷近辺に住む下級武士の一行だった。その2週間後には第2陣として29戸131人の下級武士が入植した。

しかし、武士だけで田畑を開発する開墾は成り立たないので、第3陣には37戸148人の町民が入植した。計122戸478人で入植は完了するが、やがて近隣から農民も流入し、入植地は次第に大きくなっていったという。

ただ、北総台地に位置する豊四季一帯は、地味豊かな土地ではなかった。末武氏によると、浅間山の噴火で堆積した赤土で形成されているうえ水利も悪く、豊穣な実りへの道は険しかったという。なかには、開墾地から逃亡する入植者も少なくなかった。

豊四季台一帯の土地は、紆余曲折を経て吉田家の所有となる。吉田家は、代々牧を管理する「牧士」の家系だった。

昭和になると、吉田家当主の吉田甚左衛門は、豊四季を「関東の宝塚」にしようと奮闘する。甚左衛門がモデルとしたのは、宝塚歌劇団を含む阪急グループの創設者小林一三である。甚左衛門は、慶応義塾に学んだ小林の後輩に当たる人物だった。

入居の1964年は、入植から数えて96年目にあたる

◆競馬場、軍需工場、そして…

1866年に横浜の根岸競馬場がオープンして以来、明治から昭和初期にかけて各地に競馬場が建設された。甚左衛門は、競馬人気を見込んで1928年5月に柏競馬場をオープンさせた。

柏競馬場には、1周1600mという当時の地方競馬場では最長距離のコースが設置された。第1回の柏競馬には3日間で5万人が訪れ、当時の柏市の人口6千余人をはるかに上回った。その後も開催のたびに観客が押し寄せ、柏競馬場は活況を呈した。

しかし、戦時色が強まるにつれ市民は競馬に興じる余裕を失っていく。42年には閉鎖、競馬場跡地は軍需工場建設のため日本光学工業（現ニコン）が買い取る。競走馬は軍用馬として徴発された。

戦後、柏競馬場は復活したが輝きは取り戻せなかった。48年に始まった競輪人気に押されて入場者数が激減、50年を最後に閉鎖される。競馬場の面影は、船橋競馬場で開催されるレース「かしわ記念」に残っているだけだ。

柏競馬場跡地は第三者の手に渡り、しばらくの間放置される。その間、日本は高度経済成長への道をひた走った。労働力が地方から都市部に流入し、勤労者の住宅不足は深刻な状態に陥った。

その状態を解消するため、住宅公団がこの地に豊四季台団地を建設した。明治時代に下級武士を救う舞台となった豊四季が、昭和の勤労者の住宅不足を救う舞台となった。団地には当時の最先端の設備が整えられ、勤労者に理想的な暮らしを提供した。

それから40年。2004年には豊四季台団地の建替え事業が始まった。08年には第1次建替え分が完成し「コンフォール柏豊四季台」として生まれ変わる。

09年からは柏市、東京大学高齢社会総合研究機構、UR都市機構の三者が提携し、高齢化社会に対応するまちづくりを推進している。柏市でも突出して高齢化が進む豊四季台団地一帯をモデルケースにして、「地域包括ケアシステムの具現化」「高齢者の生きがい就労の創成」をテーマに日々研究が重ねられている。

地域包括ケアシステムは、高齢者が在宅で保健、医療、介護などのサービスが受けられるというものだ。高齢者の生きがい就労は、高齢者に生きがいを持って暮してもらうための就労支援である。

高齢者にとっては、住み慣れた町で生きがいを見出し、支援が必要になったときでも安心して生活を送ることができる。真夜中に体調を崩したとしても、顔見知りのスタッフがすぐに来てくれる。そんな理想的な暮らしが、ここ豊四季で実現しようとしている。

豊四季には明治の下級武士、昭和の勤労者を救ってきた歴史がある。平成の今、さまざまな不安や不便に囲まれる高齢者に優しい町として、再び豊四季に注目が集まっている。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
［企画制作］新潮社